



文字通りの彼女

すずき ようこ
鈴木 庸子

●イタリア語通訳・翻訳家、在イタリア・ナポリ

急用で、ナポリから高速鉄道に飛び乗った。

鉄道のインフラがないがしろにされ続け、こと高速鉄道に関しては他の先進国から一周も二周も遅れた存在だったイタリアだが、塞翁が馬。恐らくまさにその長い空白のお蔭で、国鉄（2008）、続いて私鉄（2012）がこのビジネスに名のりを上げた。現在はいわば二本の新幹線が、最高時速300kmで半島を縦断している。

定刻より二分遅れの発車後間もなく、若い車掌が切符の点検にやってきた。通路を滑るように進んでいた彼だが、一人の女性の席で動かなくなった。手元の機械に切符のQRコードを何度も読み込ませては、その小さな画面をスクロールする作業を繰り返している。数分後、イヤホンを接続した携帯での会話に集中していた切符の持ち主は、車掌に渡したそれが戻ってこないことに漸く気付いた様子で

「何か問題でも？」

「ええと、ご心配なく。ちょっとお待ちください」

「この切符、私を買ったんじゃないですよね。友達が買ってくれたものですから」

「そのようですね」

ネット購入の場合、QRコードを読み込むまでもなく、購入者と利用者の氏名は切符に分かれて記載されている。

「お客様。失礼ですが、身分証明書を拝見させていただきますか」

「だから、これを買ったのは私じゃないの。私の身分証明書なんか、見たって意味ないでしょ？」

外国人特有のアクセントはあるが、流暢なイタリア語。落ち着き払って答える女性は、二月だというのにTシャツ姿だ。がっしりしたむき出しの腕には、タブレットと携帯を抱えている。この携帯、今時殆んど見かけない、通話とショートメッセージ機能のみの原始的なものである。

彼女が通話を終えて電話を切ると、間髪入れず呼び出しを通知するライトがついた。その後ローマまでの小一時間、このサイクルが切れ目なく続くことになる。どうやら彼女に電話を入れ続けているのは三人で、各々が異なる言語を話している。三カ国語を順繰りに操り、延々対応し続ける彼女の声は、一貫して無機質だった。「今、ナポリから高速列車に乗った」「ミラノで下車する」「到着は七時半。迎えに来るのは誰？」

「…おっしゃる通りだと思うんですが、この機械がそう言ってまして」

「何の役に立つわけ？」

常に通話中の彼女だが、視線だけはタブレットから車掌に移動した。上瞼いっぱい、水色のアイシャドーがぼってり盛られている。

「機械の指示に従わないと、前に進めないので、お持ちの切符の確認が取れないんです」

「ふん。私には関係のない話だけど、しょうがないわね」

分厚いパスケースから、イタリアのIDカードが引っ張り出された。そのデータを機械に打ち込む車掌の額には、脂汗がにじんでいる。

耳障りなジーッ、ジーッという音とともに、機械が紙を吐き出し始めた。その長さ、30cm強。舐めるようにこれを読み終えると、車掌は僅かにかすれた声で

「重ね重ね恐縮なんですけど、こちらにサインをいただけませんか？」

「IDの次はサインって、一体どうなってるの？」

「プライバシー保護に関する決まりでして。要は個人情報の提供を認めた、ってことです」

「それだけ？」

「ええ、ほんの形だけのことで。お手数おかけします」

車掌が差し出したペンと巻物のような紙を受け取ると、内容には目もくれず、彼女は一番下のスペースにあっさりサインした。雑に塗られたマニキュア。この間も、携帯での会話は呪文のように途切れない。

「色々にご迷惑をおかけしました。点検完了です。ご協力、ありがとうございます」

「もう大丈夫なんですよね？」

「ええ、機械はそう言っています」

「ナポリから高速列車でミラノに向かっている。もうすぐローマ。誰が迎えに来る？え、私、うちに帰るの？ミラノに行くの？どっち？」車掌に解放された彼女が、イヤホンのスピーカー越しに静かに質問を繰り返すうちに、我々の新幹線は時刻表通りローマに到着した。

乗客の乗り降りが一段落すると、先程の車掌が彼女の許へ戻ってきた。彼の後には、二人の警官が続いていた。

「警察です。おたくの切符、ちょっと問題があるようでしてね。お話を聞かせてもらいたいです」

「だから私は関係ないって、さっきから何度も言ってるのに。友達が買ってくれたの。何が悪いのよ」

「はいはい。で、そのお友達の名前は？」

「…書いてあるんだから、見れば？」そう言い捨てると、半袖の彼女はチケットを警察官に向かってほうり投げた。

「おい、俺の質問に答えろ！お前の旅はこままでだ。署まで来てもらう」

「冗談じゃない、あたしはミラノに行かなきゃいけないの」

「行けるさ、そのうち。さ、降りた降りた」

コールガールという懐かしい響きが、名実ともにしっくりきそう。ただ一昔前とは異なり、昨今ではその営業・管理・運営の一切を、多国籍の組織が分業体制で担当しているのである。警察がお出ましとなった理由としては、ネット決済で使用されたカードの番号またはその名義、あるいはIDが、何らかのブラックリストに挙がっていたあたりを想像するが、そのいずれもかもしれないし、全く別の要因があったのかもしれない。ともかく、仕事に伴うあらゆるリスクへの対応は組織によってマニュアル化済みで、今回もその想定内の展開だったはずだ。この後の解決方法に関しても、情報がシェアされていることは間違いない。

一言二言ぼやくと、彼女はそそくさと荷造りをして立ち上がった。真っ赤なダッフルコートがきつそう。

「ローマで今、警察に連行されてるところ」

警官に前後を挟まれ、電話の向こうの誰かに状況を伝えながら遠ざかって行く声は、最後まで揺らぐことがなかった。